

『純潔オメガの誘淫(ハニートラップ) 番外編』

著：高月紅葉

ill：篁 ふみ

霧雨けふるブルーグレイの海をベッドから眺める朝は、明け方まで続けた行為の熱さが熾火のようにくすぶる。

トウマはベッドを抜け出そうとして、やめた。ビーチ沿いに建つ高級ホテルの部屋は、エアコンがよくきいて肌寒いほどに冷えている。海上に広がった雨雲が朝日を遮り、外気温があがらないせいだろう。

ここ数ヶ月のトウマはマイアミに滞在していた。高級ホテル住まいではなく、家賃高めで室内の狭いアパートメントで暮らしている。

もちろん、ニッポニアの政府機関に所属するインテリジェンスエージェントとしての任務につくためだ。

二ヶ月の長期休暇をニッポニアの経済特区『サンドラ』で過ごしたあと、北欧の山岳リゾートへ飛ばされ、それからは三ヶ月ごとに移動してミッションを遂行している。基本的には各地の状況視察と新人研修の手伝いを兼ねた滞在で、ハニートラップを要する任務はたまに飛び込んでくる程度だ。頻度は以前と変わらないが、各地を飛び回ることになってから大学院は休学した。このまま退学となる可能性が高いが、籍を置いていただけだから大きな問題はない。

政府機関に所属しているトウマの経歴は、その気になれば、いかようにも書き換えることができる。あってないようなものだ。

だから、六年間通ったサンドラが拠点でなくなったこともすぐにあきらめがついた。インテリジェンスに関わる仕事していて、周囲の移り変わりに気を取られているようでは仕事にならない。名残惜しさが尾を引いたとしても、どこかで断ち切ってきた。

だから、スポット任務で組む相棒のヒューゴが変わらずサンドラにいても、うらやましいとは思わなかった。拠点を失っても、トウマにはまだニッポニアの実家がある。『帰るべき場所』だ。

それを口にすると、サンドラに残してきた恋人は、決まって物憂げなため息をつく。

トウマの人生の意味を、すっかり書き変えてしまった男は、サンドラに住む若手実業家だ。リカルド・デルセール。色気と美貌と金銭的余裕を兼ね備えたアルファであり、そして、街で一番大きなマフィア組織の影の首領でもある。

この一年で、彼の会社はさらに大きく業績を上げ、他国のリゾート不動産にも手を伸ばし始めていた。

すべては、世界中を飛び回るトウマを追いかけるためだ。

一ヶ月に一度しか会えないことに文句も言わず、移動期間のトウマが自分からサンドラを訪れ

るとき以外は、彼のほうが足を運んでくる。

ふたりは行きずりを演じ、口説き口説かれたふりをしてホテルで過ごす。

それが楽しいと言いたげなりカルドの態度は、愛だと言えば、間違いなくそうだろう。

わかっているから、トウマはときどき、ひっそりと悲しくなった。自己中心的な感情だ。

わがままを言われても困るのに、仕事にかまけて時間が過ぎてしまうたび、連絡も途絶えたりカルドが自分のことなど忘れたのではないかと不安になる。

恋人関係の終わりについてつきまとう感傷的な不安は、尽きることがない。

トウマはオメガだ。リカルドとは『運命のつがい』であり、抗いがたい本能的な繋がりを有している。しかし、まだ実質的な『つがい』にはなっていない。

第二の性の運命論を否定するリカルドは、ヒートの期間を一緒に過ごしてもなお、本能的な征服欲求を制御する。おそろしいほどに理性的で我慢強く、見かけの涼やかな色気からは想像できない鉄の意志を持った男だ。

そこがたまらないほど好ましく、仕事に命を賭けているトウマの心を揺さぶる。好きになればなるほど、彼のつがいになりたいと本能的に願ってしまう。

首筋を噛まれ、肉体も精神も束縛を受け、彼のために生き、彼のために子どもを産み育てる。

オメガの本能は、それを望むようにできていると、医者や学者は言う。しかし、トウマもまた、運命論否定主義だ。

アルファに縛られて生きることは望まないし、オメガとしての自由意志を固持していたい。

子を成すオメガである前に、男性であり、そして一個人だ。

リカルドは生き方を認めて受け入れ、トウマを自由にさせてくれる。だからこそ、頑固で素直じゃない自分自身に嫌気が差すこともあった。

そんなときでさえ、アルファとオメガ、それぞれの意気地について考えてしまう。

アルファなら意志が強いと好意的に取られることも、オメガなら意固地だと陰口をたたかれる。

それも一種の潜在的差別感覚であり、多くのオメガが息苦しさを覚える一因だ。

乗り越えていくには、飄々と生きることが一番なのだが、アルファを恋人に持ってみて初めて難しさに気づかされた。

好きになればなるほどトウマは『オメガらしく』に囚われる。だから、リカルドの愛情を信じながらも、距離を取り続けなければならない。それがトウマの抱える、恋人関係終焉への不安だ。

別れるのか、つがいになって家に入るのか。それとも、このままでいるのか。

つがいになって仕事を続けることは、フェロモンコントロールという特殊能力を使って仕事をするトウマにはありえない。精神的なバランスが取れるとは、到底思えないからだ。

それもあって、サンドラにあるリカルドの邸宅を『帰るべき場所』とは呼べなかった。

まだ付き合い始めて一年だ、とリカルドはときどき、そう言って微笑む。

トウマに対する口実であり、自分への慰めだ。未来に対する答えを急ぐことはないと言いながら、互いの愛情にひとつも嘘がないから、身体の芯にせつなさが募る。

恋人も同じ気持ちでいると、リカルドは知っているだろう。

ふたりはあえて口にせず、仕事が終わるたびにトウマはサンドラへ足を運ぶ。一方のリカルドは月に一度、仕事のついでのようにトウマを追ってくる。移動途中の中継地で抱き合うこともあった。

スリリングだと笑うリカルドの洒脱な雰囲気、トウマはいつでも酔いしれた。

その恋人は、いま、隣にいる。

柔らかな枕に頬を押し当てて眠るリカルドを覗き込み、トウマは息を潜めた。そっと額へキスをする。少し無理してもかまわないとトウマが許可を出した分だけ、夜通し求めたリカルドも疲れ果てたのだろう。

会えなかったこれまでの時間を、会えなくなるこれからの時間を、できる限りの愛撫で埋めようとする行為にはずいぶん泣かされた。

この男は、逢うたびに不思議とセックスが上手くなる。挿入を許したのはリカルドが初めてだが、それ以前の性的交渉なら何人かと経験した。仕事で少し、プレイベートでも少し。だから、比べることはできる。

リカルドのセックスは、貪るようでありながら乱暴ではなく、紳士的かと思えば振り返るのがこわいほど淫らなことにも積極的だ。

どれもこれもトウマには快感しかない。触れられるだけで身体は敏感に脈を打ち、思い出しても内側が火照る。

「リカルド。朝だよ……。リカルド」

頬や額に何度もキスをして起こすと、涼やかな目元を彩るまつげが揺れる。トウマはいたずらに息を吹きかけた。

「もう、朝か……」

眉根にシワを刻んだリカルドが、嘎れた声を出しながら寝返りを打つ。

「そろそろ準備をしないと間に合わないよ」

「ほかを待たせておけばいい」

「そうはいかない」

リカルドの移動は自家用ジェットだ。トウマとの逢瀬のために購入したもので、空港に停めておくだけでも金がかかる。

「いまなら、一緒にシャワーを浴びることができるよ。三十分後だと無理だ。ルームサービスが届いてしまう」

トウマの言葉に、リカルドはゆっくりと身体を起こした。

「きみの言うとおりにするよ」

あくびをしても間抜けに見えない男前だ。一糸まとわぬ裸体はたくましい。そして、張りのあるなめらかな肌には、ところかまわず小さな鬱血が飛んでいる。

窓から差し込むほの明るい朝光の中で、トウマはさりげなく目を伏せた。キスマークに彩られたリカルドに比べ、トウマの肌は小さなあざひとつ残っていない。

それが、ふたりの情交だ。

「トウマ」

リカルドの腕が伸びてきて、手のひらの温かさに気づいたのと同時に抱き寄せられる。

「その三十分で、もう一度だけ愛を確かめても……？」

甘くささやく男の頬が首筋に当たり、ヒゲの感触にちくちくと肌を刺された。トウマは手のひらをお互いの顔の間へ差し込んだ。押しのけながら、指先で撫でる。

オメガのトウマにはヒゲが生えない。だから感触がもの珍しい。一晩過ごしたあとの、ちょっとした楽しみだ。

もちろん、相手がリカルドだからであって、相棒のヒューゴが無精ヒゲをすり寄せようものなら、フルスイングでぶっ叩くと決まっている。リカルドだけが、なにに於いてもやはり特別だった。

「そんなに確かめないと、ぼくのことを信用ならない？」

ふっと視線を向ける。冷淡と言えるほど突き放してはいないが、ほんの少し意地悪く責めてみる。

恋人同士のとりとめない夜は、もう終わってしまったのだ。

いまの時間は、明日から始まる遠距離恋愛へ、心の有り様を戻すための調整時間でしかない。

「きみに知っておいて欲しいだけだ」

トウマを眺める鳶色の瞳がずっと細くなる。

「まだ知らないとでも？」

甘いささやきを受け入れず、あごをそらすようにして挑戦的に問いかけた。

出会ったときは、世間擦れしていないウブな学生・アンリのふりをしていたトウマだが、いまとなっては面影の名残もない。リカルドにしても、清純な可愛げを求めることはしなかった。

「わかっているだろう」

ため息をつくように言ったリカルドの目は、トウマを見つめたままだ。

いまさら、アンリのウブさや清純さを求めるはずがなかった。トウマがまばたきをしているだけで、見惚れて口説き始める男だ。目の前にある事象を最優先にするリアリストなのに、恋に於いては甘く優しいロマンチストでもある。

一貫性がないとトウマが指摘すれば、恋をしているからだと恥ずかしげもなく答えを返す。

確かに、恋は不条理だ。一緒にいられないとわかっているけど、リカルドとの恋人関係を解消する気にはなれず、それを口にするのも嫌だと思う。

身勝手でもいいから、相手を『恋人』と呼んでいたいふたりだ。

「私はいつでも、きみが欲しい」

リカルドが眩しそうに微笑む。

「昼も、夜も、ない。だからこそ、こうして耐え忍んでいるじゃないか。もう少し、恋人気分でもいいだろう？」

「弱いふりしてもダメ」

トウマは首を左右に振った。髪が乾いた音を立てる。

その頭の動きを手のひらで止めて、リカルドがくちびるを寄せた。

「じゃあ、力尽くで」

「もっと、ダメ」

笑いながら腕を振り払い、トウマはひらりとベッドと飛びおりる。と、行きたかったところだが、もう結果は知っていた。ベッドの端に腰掛けて、恋人を見る。

「あなたに尽くした、頑張り屋の恋人を、バスルームまで抱いて行く気は？」

夜通しのセックスで、足腰が立つかどうか怪しい限りだ。

逢うまでは自重しようと思っていたのに、顔を見た途端に感情が溢れ、燃え尽きるほどに交わりたいと欲してしまった。

求めたことに恥じらいはない。ただ、昨晚、ねだった瞬間は恥ずかしかった。

それだけのことだ。

「もちろんある。エスコートしよう」

全裸でベッドからおりたリカルドが、トウマを軽々と抱きあげる。

首へと腕を回したトウマは、ごく自然にリカルドの肌へくちびるを押し当てた。キスマークを追って、もう一段階、色を濃く残す。

リカルドの身体の至るところに浅ましいほどのキスマークを散らした昨晚のトウマは、独占契約の証しだとうそぶいた。誰が見ても熱烈な情人がいると想像するように残した所有印だ。

それをして当然だと、リカルドはいつも身を投げ出す。しかし、トウマがキスマークを許したのは、休暇中だった付き合い始めの二ヶ月だけだ。

スポットの任務はいつも突然に舞い込む。実年齢よりも若く見えるトウマは、清純派を演じることが多いので、全身にキスマークを散らしているわけにはいかない。

ターゲットとベッドインする予定はこれからもないが、ビーチやプールで水着になることはある。リゾートや高級ホテルでは、誘惑の一手だ。

だから、そのとき、キスマークだらけでは仕事にならない。

「無理をさせたかな」

シャワーブースの前で、トウマをそっとおろしたリカルドが言う。足腰が身体を支えられるかどうか、ふたりは慎重に見極めながら中へ入った。トウマの膝はわずかに震えたが、シャワーブースに手を添えれば立っていられる。

湯の温度を調整するリカルドを待ちながら、トウマは背中へと指を伸ばした。自分が残した爪の跡が、キスマークに混じって筋を描いている。指でなぞると、深い夜の果てで感じた悦が戻ってくる気がした。

身を寄せ、男の肌へと、くちびるを押し当てる。

「……トウマ」

ぐっところえた男の声が返った。性欲を煽るようで悪いと思いながら、トウマは耐えきれずに強く吸いつく。男の肉厚な感触にムラムラとした欲望を覚え、朝採れの生々しいキスマークをつけて舌でなぞる。熱っぽく火照る息を吐いて言った。

「……もう、挿れられるのは、つらいから……。プロウジョブでいいなら……」

たくましい腰の前へと腕を伸ばす。息を飲みそうになるほど熱いリカルドは、すでに隆々と目

覚めていた。

「して欲しいのは、きみだろう。正直に言ってごらん」

シャワーを出したままにして、リカルドが振り向く。トウマは引き寄せられるように、自分から身を投げ出した。抱き留められ、キスが始まる。

トウマの象徴も目覚めていて、指に包まれるだけで甘い声がこぼれ出てしまう。身体はまだ敏感なままだ。夜を引きずっているのがわかり、思わず手の甲でくちびるを押さえて顔を背けた。

「どうして？」

リカルドが笑いながら、トウマの手を剥がそうとする。

「だって、あなたに悪い……」

繋がることができないのに欲望を煽っている罪悪感を訴えると、リカルドは小さく感嘆の声を発してトウマの髪へくちづけた。

「昨日の夜、あんなに愛してくれただろう。いつものように誇っていい。最高の夜だった」

甘いキスがくちびるを塞ぎ、トウマはつま先立ってリカルドの首に腕を回す。身体を支えるために出てきた足で膝を割られ、たくましい腿がトウマの内ももを撫でるように動いた。

「んっ……、んっ」

思わず、腰を動かしてしまい、声が漏れる。

「もっと、キスをしよう。トウマ」

リカルドの手が腰へ回り、シャワーがあたっていた壁へと追い込まれる。水流は別方向へ向けられ、トウマは温まった壁に背を預けた。その間もキスは続き、どちらともなく、相手のものを握る。

キスが繰り返され、舌先を舐め合う。吸ったり吸われたり、たどったり、絡めたり。そのたびに手の中で欲望が脈を打ち、腰が震える。

「きみが好きだよ」

甘いささやきにせつなさが募り、トウマは潤んだ瞳で恋人を見つめた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>